

---

# 歪む世界

り太

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

歪む世界

### 【Nコード】

N7222C

### 【作者名】

り太

### 【あらすじ】

きっと俺のような人間はこの地球上に極少数しか存在しないだろう。普通の人と少し違った考えをもっていたどこにでもいる高校生鈴木雄二。彼は自分をさらけ出すことなく生きていた。しかし彼の人生は急展開を迎える。インターネット。謎のサイト。そのサイトで知り合った一人の女性。名前は青。彼女は雄二が今まで会った人間とは違っていた。彼女に惹かれていき、彼女の想いに答える事で雄二の日常は360度変わっていく。命令。使命。任務。彼女の所属する集団「歪」そして、雄二もその集団に入ることを決意する。

そして始まる。新たな物語。雄二の新しい日常。歪む世界が・・・。

## プロローグ（序章）（前書き）

初めてなんであらすじもまともにかけません。  
かなり長編ですが良かったら読んでみてください。

## プロローグ序章

春

食パンをくわえ、玄関から出る。

春とはいえ、まだ肌寒い。

寒さに負けないように早足で体をちぢ込ませながらは学校へ向かう。

「だるい……。」

食パンを食べ終わると、両手をポケットに入れて下を向きながら歩き出す。

そう。どこにでもいる高校生。当たり前の日常。

そんな当たり前の日常を鈴木雄二も生きていた。

普通の人とは少し違った考えを持っていたがそれをさらけ出すことなく

普通に生活をして普通に生きていき老後を終える。この時は本人でさえそう思っていただろう。

しかし一人の女性との出会いで雄二の人生は急展開を迎える。

今の雄二は知るよしもなかった。

この頃はただ日々を繰り返していた。

重い足取りで雄二が歩いていると大きな校舎が見えてくる。

公立東高校。偏差値62。雄二が住んでいる地域では偏差値は高い方だった。

校門の近くまで行くと先生の声が聞こえてくる。

「遅刻するぞ〜。」

だが、そんな声聞こえないかのように足取りを早くすることなく校門をくぐった。

「おう！雄二！聞いてくれよ！」

教室に入った途端でかい声をあげ、雄二にしゃべりかけてくるモヒカンで身長190cmはありそうな巨体。

彼は学校一の不良、森田戒。

雄二も162cmと男では小さい方だが戒と並ぶと余計にそれが目立つ。

そのくらい二人の身長の違いはすごかった。

「ん？またケンカでもしたん？」

戒が話してくるのはケンカの話ばかりだ。

自分の自慢話、たまに女の話。

それを聞くたびにいつも雄二の頭には一つの文章が浮かぶ。

何て低度の低い人間なんだろう。と。

雄二は世間一般でいう不良グループと仲が良かった。

いや、どっちかっていえば、仲が良いフリをしていた。

別に自分から仲良くなるうとした訳ではない。

ただ寄って来た。だから仲良くなった。ただそれだけのことだった。

朝のHRが始まるまで戒は雄二に話しかけていたが、

雄二は内容も聞かず少しにやついた表情でうなずいていた。

俺は人とは違う、特別な人間だ。

現実はそのでもなかったかもしれない。

だけどそう思いたかった。

歩く人間達をバカにし、そいつらを下等生物だと思う。

世の中死んだほうがいい人間ばかりだ。

今俺と話している戒。こいつもその一人だと思ってる。

そして自分すらも。

雄二の学校にはいわゆるグループが存在する。

そのグループは大きく三つに分けられる。

不良グループ。普通グループ。オタクグループだ。

不良グループはオタクグループをいじめ、普通グループはそれを見

て笑う。

不良グループが一番強いが、その中でも階級が存在する。まず、学校一の不良の戒が一番上。そしてそれに群がるバカな不良ども。

彼らの間に友情なんて成り立ってないが、戒についていけば、でかい顔ができる。

そんな理由で戒には友達がいる。その群がる中に僕もいる。

普通グループは不良グループにはあまり関わらないが、

逆らいたくないし、オタクグループを不良グループがいじめる時には不良グループの味方になる。安全な位置にいるグループだ。

オタクグループは察しの通り・・・不良グループにいじめられ女子からも気持ち悪いと言われる始末。。。

人間は平等だ。って誰かが言ってた。

だけどさ、世の中生きてる人の大半が感じてる。

この世の中平等じゃないって。

昼休みになると不良グループがオタクグループの吉井堅をいじめはじめた。

吉井堅はいわゆるオタクの中のオタクだ。

週4で秋葉原に通い、いつもアニメの人形を持っている。

オタクグループの中でも目立つ存在で一番標的にされやすい。

だから戒の機嫌が悪い時少しでも目があつと真っ先にいじめられる。

雄二は戒やら他の不良やらが堅をいじめてるのをただ横で見ている。

堅の仲がいい友達でさえ何も言わず見ているだけだった。

「やめてください！やめてください！」

ドゴツ！

その言葉は虚しく、堅の顔面にパンチが入る。

堅は5mくらい吹っ飛んで鼻血をだして倒れた。

「俺を調子こいて見てるからだよ！」

戒はそう言った直後、堅の上にまたがって、また殴り始める。

「いいぞやれやれ!!」

不良グループが戒を調子づかせる。普通グループも皆、それを見て笑っている。笑わない人間もいるが無関心だ。しかし内心皆、思っているだろう。正直見られない。こんな時少しかだけ助けようって気持ちにもなる。けど、助けたところで標的になるのは自分だし。みんなの心の声が聞こえてくるようだった。

「(まあ・・・所詮自分がみんな可愛いんだよな。)」  
そんなことを考えている雄二の横を女が通り抜けていく。

「ちよつと、やめなさいよ!」  
学校一の不良、森田にこんな口を聞けるのは学級委員長の矢沢由良。彼女だけだ。

まさに、優等生中の優等生、スポーツも万能で頭もいい。困っている人は見過ごせない。正義感たっぷりの女の子だ。

優等生と言うとメガネをかけて真面目そうな女の子を想像するかもしれない。

由良は容姿もいい。今時の女子高生とは言いがたいが、知らない人が見ても

ふと振り向いてしまっくらいきれいだ。

「またてめえか!!!」

殴っている手を止め、由良のほうに向かう戒。

怒っているのか、ドストドストと大きな音を教室に響かせながら近づいてく。

「てめえもぶつ殺すぞ!!」

「できるものならやってみなさいよ!!」

由良は強気だった。それもそのはず。学校一の不良、戒とはいえ、さすがに女は殴れない。妙な沈黙が場の空気を重たくする中、戒が口を開いた。

「クソ・・・。今日のところは勘弁してやるよ。」

そう言うと、戒は群がっている不良グループをつれて教室を出て行



った。

「まったくもう……。」

戒達がでていくと由良は安堵の息を吐いた。

「まあ……。そんな怒らない怒らない。」

怒りをあらわにしている矢沢に雄二が話しかける。

しかし、怒りの矛先は雄二にも向いた。

「あなたもあなたよ！何でとめないの！」

大きな声が教室中に響き渡る。

この間にいじめられていた堅は礼もいわずに顔をおさえながら静かに自分の席に戻った。

そして人形に向かって何かをブツブツと言っている。

感謝の言葉も何一つない……。

何でこんな人間ばかりなんだ。

「聞いているの!？」

考え事をしててうわの空だった雄二に由良はさらに声を張り上げる。

「いや……。小さな俺にそんな力ないよ。第一、森田とは仲いいしね。」

「仲がいいならなおさら言うべきでしょ!？仲がいいのに戒君が怖いのか?」

「怖くは無いよ。大切な友達だからね。」

俺があいつに何も言わないのはあいつの性格を知ってるからだよ。

俺が言っただってやめるわけじゃないし。あいつだって殺さないように

に加減もしてるでしょ。」

その言葉がさらに怒りに火をつけたのか再び由良の説教が始まる。

「だからって雄二君は人が殴られてるのを見て何も思わないの？」

それに殴り続けてれば死んじゃう子だっているのよ?」

「その台詞……。このクラス全員に言ってみれば?」

その言葉に由良は教室を見渡した。嫌悪の表情で見ている奴。目を

そらす奴。無関心の奴。

さっきの助けた堅なんてもう立ち直って

オタクグループと一緒に今週のアニメの話をする始末。

さすがにクラス全員に言うことはできないのか

由良は怒ったような表情でクラスの人間を見ている。

「ほら？言えないだろ？あんたの正義感に満ちた行動には拍手を送りたいくらいだけど。」

きつとみんなもそう思ってるよ。だけど人生そんな甘いことばかりじゃないよ？

そのうち痛い目見るかもね。ほどほどにしときな。犯されないようにね。」

雄二は少しにやけた表情になった。

その言葉に動揺を隠せず怒ったような困ったような顔をしながら無言で雄二の前を由良は立ち去った。

どこか行くところがあるのでないと思うが教室をでようとドアを開けた。

「あなたも本当・・・嫌な人よね。」

捨て台詞をはいて、教室を出て行く。

ああ・・・そんなこと言われなくてもわかってるよ。

俺は嫌な奴だけど、この世界に生きている大半は嫌な奴だ。

あそこに座ってるあいつも！あいつも！

みんなみんなこの世界に必要なって無い人間なんだ。

## プロローグ（後書き）

はいはいはい。まだまだ全然プロローグです。

小説の書き方もヘタクソだし、あらすじも訳わからんし……。上手くかけないんです（^^；

自分で読み返してもかなり悲しい……。

でも、中盤くらいから面白い展開になると思います。

皆さんから見たらまだまだ自分は全然ダメダメですが

頑張って完結させようと思ってますのでぜひ暖かく見守っててください！！！！次も早めに更新します！

頑張ります！！！！

## 第1話 メール

キンコンカンコンコン

学校のチャイムが校舎中に響き渡った。

クラスの人間がバッグに教科書やらノートを詰め込んでいる。用が終わったのか一人一人教室を出て行く。

その中、雄二も教室を出て行こうとした。

「おう雄二。今から南校に行くぞ。」

雄二に話しかけてきたのは戒だった。

その後ろに3人くらい不良グループの人間がたっている。

「ん？何で南校？」

南校は東高から10分くらい歩くとある学校だった。

偏差値の高い東高とは反面、偏差値は33しかない。

学校の8割が不良。就職先はほぼヤクザ。いわば不良が集まる学校なのだ。

「今日の朝話したろ！！南校の奴らをぶちのめしたんだけどよー。

竜介さんに話が回つちまったらしく今日謝りに行くんだよ！」

そういえばそんな事を言つてた気がするなあと思った。

竜介というのは、南校のOBでめちやくちや性質が悪い奴だ。

鑑別にも入っていて、人を平気で刺したりもする。

さすがの戒でも頭があがらないらしく南校の奴に手をだすと頭を下げている。

しかし竜介自体は戒を気に入ってるようなので

普段から南校に手をだしても謝るだけで許してくれる。

何度か雄二も会った事があるが優しくしてもらっていて

ハンバーガーをおごってもらったりした。

「ん〜・・・今日は俺パスしていい？デートだからさ・・・。」

雄二には彼女がいた。小柄でクリクリした目が印象的な女の子だ。

中学の時から付き合っていて今も続いている。

「それじゃあ仕方ねえな！じゃあまた明日な！」

諦めが早いが、戒はこういう時は結構いい奴で素直に引いてくれる。それも雄二を大の親友だと思いつ込んでるからこそだと思っただが。戒と別れの挨拶をして少したつと雄二はため息をもらした。

それとほぼ同時に雄二の携帯の着信音が教室に響く。

「はい？」

「もしもし〜。奈美だよ。」

奈美と言うのはさつきも紹介したクリクリした目が印象的な雄二の彼女だ。

中学2年生の時から付き合ってるからもう3年になる。

一度も別れの危機もなく何だかんだで今も続いている。

それは雄二が怒る人間ではなかったからだ。

表と裏はあるが決して雄二は裏を見せなかった。

本当の自分と真逆に生きている。

表の雄二は口は悪いが優しく、容姿も可愛い感じで嫌われる対象ではなかった。

付き合ったときも奈美から告白してきた。嫌いではないし

断る理由もなかったのでOKをした。

しかしこんな彼女でさえ雄二の心の中では必要な人間ではなかった。捨てる気になればいつでも捨てられる。

適当な会話を10分くらいやりとりして待ち合わせ場所を決める話題に入る。

「じゃあそこに5時ね ばいばい。」

電話を切ると雄二はまたため息をもらした。

「疲れた・・・。」

そして雄二は教室をでて待ち合わせ場所へ向かった。

歩いていると見慣れた風景が目に入った。そしてまた新しい見慣れた風景が目に入る。

木。道路。空。雲。店。自転車。車。そして人。

その全てが何も感じない。

何で生きているんだろう。どうして自分を偽ってるんだろう。今思えばこういう風に思うようになったのは高1の夏からだ。

時間がたつにつれて全ての人間が意味の無いものに感じるようになった。

最初は薄々だったけどだんだんと明確になった。

中学までは何も考えず楽しく心から笑っていた気がする。

もうそんな自分今とはかけ離れた遠い遠い存在だ。

だけど、戻りたいなんて思わない。逆に今の自分になれて嬉しかった。

だったら偽らず自分をさらけ出せばいい。

けど、そんな簡単なもんじゃないんだよな。

そしたら今まで作り上げてきた自分の位置それもなくなくなってしまっ  
んだからさ。

手放したくなんてないんだよ。そうそんな弱い弱い自分。

俺もあそこに歩いている奴と同様、意味の無い存在なんだ。

本当の俺は一人だ。だけど偽りの俺は一人じゃない。

中学の頃大人になるっていうのは18歳になることだって誰かが言  
った。

俺もあと少しで18歳。これが大人になったってことか？

こう考えられるようになったのは大人になったからなのかな？

いや、違う。俺が今の自分になったのは、あの事件がきっかけ……

色々な事を考えながら歩いているといつの間にか待ち合わせ場所に  
ついていた。

時刻は5時2分。まだ奈美は着いていなかった。

ポケットからタバコを取り出し火をつける。

煙をはきながら腰を下ろし小10分。小柄な女の子が雄二のもとへ  
近づいてくる。

「ごめん待った〜???」

少しもごめんと言う顔はしていない。これはいつものことだ。

奈美が約束の時間に遅れてる来るのは日常茶飯事。

でもそれを雄二が指摘することはなかった。

「全然待ってないよ。俺も今来たところだからさ。どこ行きたい？」

「ん〜いつものショッピングセンターがいいなあ〜。」

すっごい可愛い服があるお店見つけたんだ。」

「わかった。じゃあ行こうか。」

雄二が歩き出すと奈美は腕を絡ませてくる。

雄二は驚くそぶりも見せず平然としている。

奈美は嬉しそうな顔で雄二に話しかける。

それに対して雄二は愛想笑いを繰り返していた。

ショッピングセンターに着くと、奈美は待ちきれないので

雄二の手を強く引つ張り小走りで走り出す。

雄二も仕方ないなあという顔（もちろん内心は違うが）で、走り出す。

服屋はショッピングセンターの二階にあった。

オシャレなお店。可愛い女物の服がたくさんおいてある。

中に入ると店員さんが「いらっしやいませ〜。」と愛想のいい声で迎えてくれる。

中は今時の女子高生やカップルでいっぱいだった。

みんな楽しそうな顔で服を選んでる。

「ね〜。どの服がアタシに似合いそう??」

たくさん並んである服の中を雄二がかきわける。

奈美は小さくて童顔だったのであまりキレイ目な服は似合わなかった。

と、いうより着れなかった。今来ている服も古着MIXみたいな格好だ。

雄二が服をかきわけているとデイズニー系の服を見つけた。

「おっこれなんて奈美に似合うんじゃない？」

それはミッキーの模様がたくさんついているジャケットだった。それを見て奈美は少し怒ったような顔をして

「も〜。アタシこんなきれいな顔ほど若くないよお〜。」

そう言っつて雄二の胸を叩く。雄二はにやつきながら、その服を売り場にもどす。

その後店の中をぐるぐると回って、色々なものを手に取る。

そして目についた水玉模様のフリースを手に取った。

「ん〜、これとかどうかな？」

「わあ！可愛いかもお。。これなら上に着れそうだしね」

それを奈美に渡すと本当に嬉しそうな顔をしている。

「試着してみれば？ちよ〜うど試着室あいてるしさ。」

店の隅にある試着室を雄二は指を指した。

「うん じゃあ試着してくるね」

奈美が試着してる間、雄二も自分にあつた服を探していた。

女性物が多かったが男性物も少し置いてある店だったので待ってる間退屈ではなかった。たかが一着試着するだけだが、女性が鏡がある

ところに入ると長い。

着終わつても髪の毛をチェックしたり化粧をチェックしたり、それは奈美も同様だった。

雄二が少し離れたところで服を見ていると試着室のカーテンが開いた。

「どうかな・・・似合ってる？」

少し今の服には合わなかったが、それでも変ではなかったし似合っている」と雄二は思った。

「ん〜、70点って所かな？」

にやついた表情で雄二は答えた。

「も〜。それほめてるんだかバカにしてるんだかわかんないよお！」  
むくれた表情で奈美はそっぽを向いている。

そんな奈美に雄二は優しくかけより頭をなでた。



「冗談だよ・・・可愛いよ。」  
奈美は照れたような表情をして雄二の胸に頭をコツンと当てた。  
人が見ていたので少し雄二も焦ったのか奈美を自分から少し離れた。  
奈美もちよつと恥ずかしかったのか照れ笑いをしながらカーテンを  
しめた。

着替え終わると、それをレジまで持っていく。

奈美がサイフを取り出すと雄二は自分のサイフから  
一万円を取り出しカウンターに置いた。

「これは俺からのプレゼントってことで・・・。」  
奈美は少し悪いような表情をしたがすぐに微笑んだ。

「ありがとう。今度のデートの時に着ていくねえ」  
お会計をすますと店からでてシヨッピングセンターを歩き回った。  
くだらない話をして冗談を言って笑ったりしながら。

奈美はこんな雄二が本当に好きだった。時々何かを考えている顔  
をしてる所も。

自分には本当に優しくしてくれる所も。雄二の笑顔も。全てを愛し  
ていた。

この人だけはアタシのそばにずっといてくれる。あたしの弱いとこ  
ろも

強いところも全部全部わかってくれてるから。好きだよ。雄二。

気づくと時間は9時を回っていたので奈美を家まで送って

お別れのキスをしてその日はサヨナラをした。

時刻9時45分。

雄二は家に着くと部屋の電気をつけることなくベッドに倒れこんだ。

「疲れた・・・。」

お互いに楽しい時間を過ごした。

奈美はそう思ってるかもしれないが雄二はそうでもなかった。  
優しくするのも笑っているのもそれは自分の位置を守るため。

決して本当の雄二ではないし本当の自分を奈美には見せなかった。幸せ。

誰もがそう思うような時間でも雄二は違かった。ただ疲れるだけ……。

「俺って生きてて意味あるのかな……。」  
ただ偽って、楽しくもない時間を生きる。

自分をさらけ出す事も出来ない。臆病な自分。いつそのこと死んでしまおうなんて気持ちにもなる。

けどそれはできなかった。死ぬ事は怖かった。

「腹減ったけど、飯……作るのめんどくせえなあ……。」

雄二の家に両親はいなかった。死んでしまった訳ではないが海外に住んでいる。

雄二も海外に来る事を誘われたが、

ここにいたいと誘いを断って、一人暮らしをしている。

断った理由は別に何かあるというわけでもなかったが、単純に一人暮らしを試してみたかったそれだけだ。

「暇だな……。PCでもいじるかな。」

だるそうに立ち上がってPCのスイッチを入れた。

「あつ！そういうえば……。母さんからメール来てるかな。」

PCが立ち上がると雄二はPCのメールBOXを開いた。

ピコンという軽快な音が鳴った。『新着メッセージが三通あります』

「やっぱ来てる……。心配するから返しておくかな。」

その時雄二の目に一つのメールが目にとまった。

【一緒に自殺しませんか？】

「……………」

そのメールにはサイトが貼り付けてあった。

少し、気になったが雄二は母のメールを再度クリックして返信を始めた。

自殺……。同じような考えを持っている人間がいるんだな。

死ぬ事が怖いから仲間を集めようとする。低俗な人間が考える事だ。

そして母にメールを返信し終わると、雄二はベッドに倒れこんだ。

## 第1話 メール（後書き）

そんな感じですよ。

自殺しませんか？というメールをみて雄二はどんな行動をとるんでしょうね。

こんなにも充実した毎日を過ごしているのに彼の心は全く充実していない。寂しい事です。

## 第2話 自殺サイト

あれから何時間かたつてもう時間は深夜になっていた。  
しかし雄二はさっきのメールが頭から離れなかった。

「自殺・・・か。」

死んだらどんな世界に行くんだろうか。

死んだらどんな道を歩くんだろうか。

死は怖いけど、こんな無駄な毎日を生きているくらいならいっそ  
。

パツとベッドから起き上がり雄二はPCを開いた。

メールボックスを開き、さっき見たメールをマジマジと見た。

【一緒に自殺しませんか？】

ただ、ちよつと見るだけだ。そう自分に言い聞かせて  
そこに貼り付けられているサイトをクリックした。

サイトを開くとそこは黒の背景に掲示板しかないサイトだった。

掲示板をクリックすると色々な書き込みがあった。

【37歳の男です。妻と別れて生きていく気力がなくなりました。  
でも、一人で死ぬのは怖いです。誰か一緒に死にませんか？】

【誰か一緒に自殺しませんか？書き込み待ってます】

そんなような書き込みが何件も何件もあつた。

世の中にはこんなにも死にたがってる人間がいるのか。

明るい笑顔で生きている俺の周りの人々。

死にたがってる人間なんていないと思つてた。

でも、自分と似たような考えを持っている奴等がいて  
そいつらはみな死にたがってる。

少しだけ世界が明るくなつた気がした。

それから時間が過ぎて書き込みが雄二はほとんど見終わった。さすがにもうそろそろ眠い……。

寝るかな。そう思った矢先だった。新しい書き込みが一件入った。そして雄二はその書き込みが目が釘付けになった。

【私は22歳の女です。きっと私のような人間はこの地球上に数人しかいないでしょう。

今を偽って生きています。誰も彼も、必要のない人間にしか見えません。

私の周りは誰も彼も平等だとは思えません。だから殺そうと思っていません。

ここにいる人はみんな死にたがっているんですね？

必要のある人間なんて極少数しかいません。もし死にたがってるなら私が殺してあげます。

本当に死にたいなら明日の夜、私が指定する場所に来てください。

みんな、みんなこの世には必要のない人間です。だったら私が人数を減らしてあげます。

メールをください。待ってます。】

ゾツと寒気がした。

「何だこいつ……。」

普通じゃない。そうとしか思えない書き込みだった。

自殺サイトに殺人予告？

しかも22歳の女って、どんな女だよ……？

「……考えには共感できるけどな。」

その書き込みの内容は雄二が心に秘めていることとほぼ同じだったのだ。

自分のような人間は極少数しか存在しない。

人間なんて必要ない。

さすがに周りの人間を殺そうとは思わなかったが、

その書き込みは雄二の心を釘付けにした。

自分と同じような考えを持った人間が一人、ここにいた。

一体どんな奴なんだ？俺と似た考えをもった人間。

明日本当に殺人を犯すのだろうか。

気になってしょうがなかった。

この女に会ってみたい。

ただ、それだけで雄二はメールを送っていた。

「場所を教えてください。」

少し時間がたつと雄二のメールボックスに新着メールが届いていた。

## 第2話 自殺サイト(後書き)

久しぶりの更新です。

そろそろ物語動き始めちゃいます。



### 第三話 放課後のケンカ

【場所は3日後、夜九時、地図を送りましたのできていただければ、私の方から話しかけます。】

返信が返ってきた。

自分と同じ考えをもった人間。

会ってみたい。会話をしてみたい。

もしかしたら、危ない人かもしれない。

ただのひやかしかもしれない。

だけど、こんなに歪んだ考えをもった自分と

同じような考えを持った人間がいる。

きつとこれから生きていく中で、共感できる人間に会える確率なんて0に等しいだろう。

少し考えてメールの返信をした。

【わかりました。】

次の日起きると雄二はまた学校へ行く。

いつもと同じように戒が話しかけてくる。

「おう！雄二！！！！他の学校に生意気な奴がいやがつてよお！！」

今日、放課後ケンカするんだよお！！」

また、ケンカか。

「相手が何人連れてくるかわからないんだけどよお！

正直、俺一人じゃやばいかもしれねえんだよ！」

やばいとかいうけど、俺は戒がケンカで負けたことをみたことがない。

前に二人で、駅にいた時に5〜6人とケンカになったが、

ほぼ、無傷で戒は勝っていた。

そのくらい、戒は強かった。

「戒なら、100人きても余裕だろ？」

俺身長低いし、行っても足手まといだよ。」  
笑いながら、そう話すと戒が語りだす。

「何言ってるんだよお！お前が強いのは俺は知ってるんだよ！！！」  
一年の時に、俺がこの頭をぶつつぶそうとしたら、  
倒れててよお！そこにはお前がいたじゃねえかよ！！！」

ああ・・・あの時のことか。  
俺も中学生の時は荒れていて、高1までは一日一回はケンカをして  
るくらいだった。

正直、ほとんど負けたことはないし、ケンカには戒ほどじゃないが  
自信がある。

中学生の時、ボクシングをやっていたのも一つの理由だが・・・。

「あれは、たまたまだよ。戒なら俺がいなくても大丈夫だよ。」  
いつものように流そうとしたが、戒がしつこく頼んでくるので  
一緒に行くだけと約束をして、了承してもらった。  
めんどくさいことになっちまったなあ・・・。

放課後、戒を含む数人の不良グループと一緒に他の高校生がいる場  
所へ向かった。

くだらない話をしながら、10分ほど歩くとその場所についた。  
もうすでに、相手の高校生は鉄パイプやら木刀をやらをもってやる  
気満々だ。

「おうこらあ！！！戒！！！戒！！！てめえ！！！ぶつ殺してやるよお！！！」  
相手のリーダー格であろう男が大声で叫ぶ。

そいつを含めて15人くらいいる。  
こっちは5人。あきらかに不利だ。  
だが・・・負けないだろう。戒がいるし。

「おう！お前等！！！！行け！殴れ！！！！」  
戒がそう叫んだが、さすがに人数が多いので、不良グループの数人は  
びびっていて、ためらっている。

そうすると相手の高校生5人ほどがこっちに走って向かってきた。

「うあああ!!!」

鉄パイプをもった男がこっちの仲間に向かって鉄パイプを思い切り振り下ろす。

それを思い切り頭にくらい、不良グループのうち一人が血を流してしまふ。

「いてえ……いてえ!!!」

「うあ……うああ!!!」

こっちの不良グループは全員逃げ出してしまった。

血がでたやつも泣きながら、そいつらの後を追った。

「おいてめえら!!!」

戒の呼びかけもむなしく、戻ってはこない。

それもそのはず。

いつも戒と一緒にいてでかい顔をしてるが、あいつらなんて人に頼り切ってるどうしようもない奴らだ。

そうすると、むこうの奴らは笑いだした。

「ハハハ！お前も逃げてもいいんだぞお戒!!!」

そうすると、戒の目つきが変わった。

こうなると、戒はとめられない。

しかし、さすがにこの人数はきついかもしれない。

やってやるか……。

「戒。強そうなやつは任したよ。」

そう言っただけは、鉄パイプをもった数人に向かっていく。

まずは一人にとび蹴りを食らわした。

そして、着地すると同時に思い切り顔面に拳を打ち込む。

「このチビ!!!」

近くにいた仲間が鉄パイプを振り下ろしてくる。

俺はそれを、かわして、そいつの髪の毛を掴んだ。

「はいはい。武器は危ないから離そうね。」

その直後、顔面を思い切り殴った。

ボクシング仕込みのパンチだ。

相手は数メートル吹っ飛んで一撃で気絶した。

「戒!!!さすがだぜ!!!俺もやるぜえ!!!」

戒も相手の高校生達に向かってく。

戒はめちやくちや強い。

そしてめちやくちやタフだ。

多少攻撃をくらっても、ひるまず相手を打ち倒している。

10分ほどすると、立っているのは俺と戒とリーダー格の男だけになつていた。

「ほらほら!逃げてもいいんだぜ!!!」

戒が笑いながらさういうと、相手の男はキレたような表情をみせた。勝てないと悟つたのか、懐から何かをとりだす。

ナイフだつ!!!

戒はちょうど、こっちを向いていてナイフに気づいてない。

相手のリーダー格の男は戒に向かってくる。

「戒あぶねえ!!!」

俺は戒を思い切り蹴っ飛ばした。

嫌な記憶が頭をよぎった。

「ちっ!!!邪魔すんじゃねえ!!!」

リーダー格の男は俺に矛先を向けた。

「てめえ!!!」

ナイフで切りかかってくる。

俺はそれをよけて、間合いをはかる。

「そんなもん使つて強がつてんじゃねえよ!!!」

ナイフをもつた右腕に思い切り蹴りをぶちこんだ!!!

相手のナイフは吹っ飛んでいく。

「あ.....」

そして、すかさず間合いをつめて

「出直してきな。」

顔面にパンチをぶち込んだ。  
相手のリーダー格の男は思い切り倒れて長いケンカが終わった。

ケンカが終わると戒と二人で家の方向に俺達は歩き出した。

「なあ、雄二。助けてくれてありがとな。お前やっぱめっちゃくちゃ強いよ。」

戒は照れくさそうな表情で俺にお礼を言ってきた。

俺にとって必要のない人間なのに反射的に体が動いてしまった。

それは何でなんだろうな……。

「そんなことないよ。戒には勝てないしね。」

そうすると戒は大声で笑った。

「まあ俺の方が強いけどな。お前の蹴り。めっちゃ効いたぜ。

お前ともいつかタイマンだな。」

「いや、勘弁してください」

二人で声だして笑った。

どうして、俺は戒を助けたんだろうな……。

別にいなくなってもいいって思ってるのに……。

その時の俺にはその理由はわからなかった。

だけど、その時は深い意味なんてないって思っていたんだ。

その時、笑えたことが心から笑っていたなんて今の俺には気づくよしもなかった。

「戒、ケンカはあんまりすんなよ。」

俺がそう言つと戒は微笑んでいた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7222c/>

---

歪む世界

2010年10月27日01時55分発行